滋賀文化財だより
NO. 121
1987. 11. 30
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

149. 彦根市妙楽寺遺跡出土の湖東流紋岩製小形板碑と製作工程

1. はじめに

彦根市南部にある荒神山の東麓に位置する妙楽寺遺跡（彦根市日夏町所在）で、昭和60年度に宇曽川改修工事に伴って発掘調査を実施したところ、室町時代後半――16世紀前半頃を中心とする集落跡が検出された。調査成果の詳細については、『宇曽川災害復旧助成事業に伴う妙楽寺遺跡』II（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会　昭和61年）にゆずりたいが、この調査で石造美術の研究にとってきわめて興味深い資料が出土している。

調査で出土した石塔などの石造品は、石仏6体（主に小形板碑）、宝篋印塔の笠1点、組合せ式の五輪塔の部材3点（笠、塔身、基礎各1点）、一石五輪塔1基である。各石造品の材質は、ほとんどが湖東流紋岩で舟形の地蔵石仏1体が角閃玢岩であった。これら石造品は、妙楽寺遺跡では、石材を用いた各種の遺構――例えば溝に伴う洗い場状遺構の石積みや石列などに転用して使用されたものである。

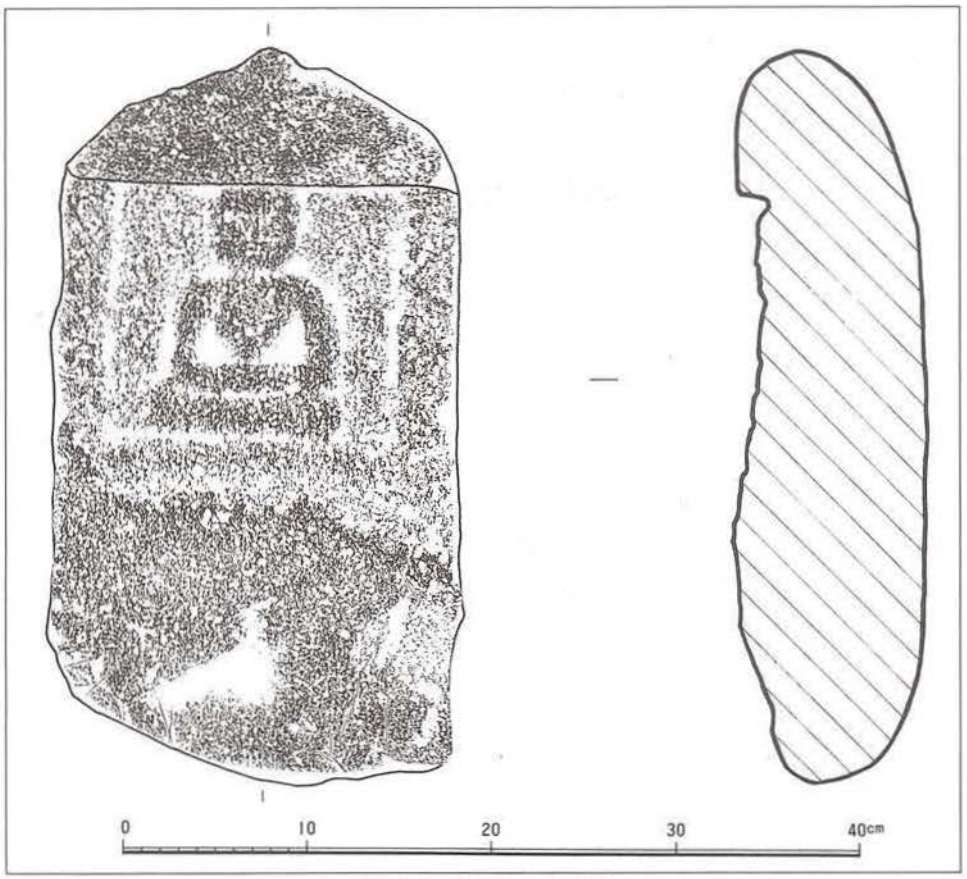
2. 問題の所在

妙楽寺遺跡出土の石造品で特に関心をひいた点は、遺構の石組みなどに転用された石造品が、現在墓地など地上に残されている石造品に比べてはるかに風化が少ないことである。それは、遺跡が16世紀後半頃に廃絶し、それ以後今日まで約 400年の間遺構が地下に埋没していたためである。中でも報告書に紹介された小形板碑（写真）は、その保存状態も良く、一目見て河原石を利用して製作したことが判るものであった。このように明確に河原石の原石肌を全体に残した室町時代後半の小形板碑は、滋賀県内ではけっして一般的なものではない。室町時代になって、県下各地で普遍的に認められる小形板碑は、正面部分についてはほぼ全面に加工が施されているのが常である。ただ地域によって、使用される石材や細部の意匠に若干の相違がある。そのような分類からみると、河原石加工の小形板碑は、犬上川流域を中心とした地域の特色といえる。

河原石を利用した石造品については、全国各地に例

第1図　遺跡位置図(25,000分の1)

第2図　小形板碑正面写真



第３図　小形板碑実測図

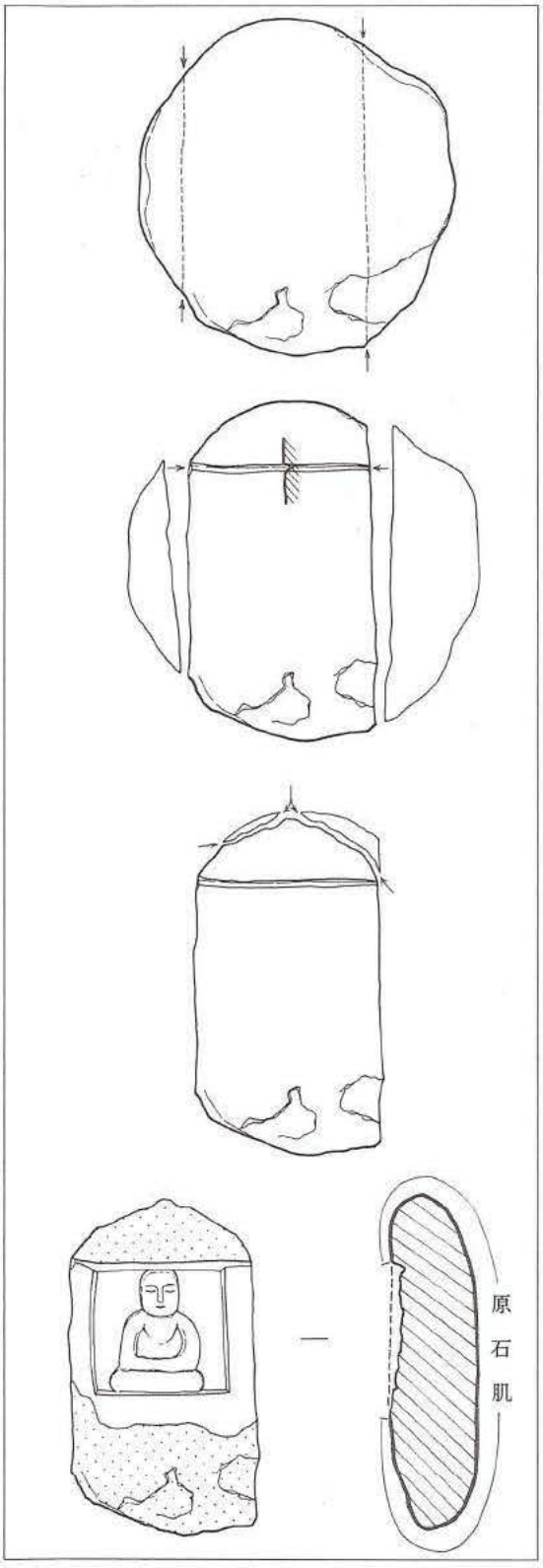
がある。しかし、石造品としては採集しやすい手近かな石材を用いたものであるため、優れた石材産地の製品に比べて安直なものであるとの感は否めなかった。ところが、中世の硬質石材の採石技術を検討してみると、必ずしも河原石を利用した石造品の加工が安直なものであると言えない状況となっている。例えば、近江でも屈指の中世石造美術の石材（花崗岩）を供給した、蒲生郡日野町蔵王にあるかったい谷の石切場の調査から、中世には今日見られるように岩盤から石材を切り出すのではなく、土中の玉石や岩盤の崩れを石材として利用したものであるとの結論を得ている。また、やはり中世石造美術の石材としては、日野町蔵王と双璧をなす近江八幡市岩倉の石材でも同様である。岩倉産の石材で製作された鎌倉時代後期の層塔では、笠の裏面に玉石の原石肌がわずかに残っていることが確認されている。こうしたことから、中世の花崗岩に代表される硬質石材の加工は、玉石など自然石を削りながら整形して行く方法が主流ではなかったかと推定している。そう考えれば河原石の利用も、きわめて中世的な選択であり、その評価も再考の必要があろう。

３．小形板碑の観察

出土状況　ここで検討しようとする小形板碑は、調査を担当された伊庭功氏によれば、遺構に伴うものではなく、遺構面より浮いた状態で、遺物包含層中の集石より発見したものであるという。

寸　法　小形板碑の石材は湖東流紋岩で、保存状態は極めて良い。総高39.8cm、厚さは最大で10.4cmを測る。額部は高さ 7.5cm、最大幅21.4cmで、原石肌のままの素面である。額より最も深いところで 1.8cm彫りこんで、高さ15.0cm、幅上端15.8cm、下端16.0cmの輪郭を刻み、その中に弥陀定印坐像一体を半肉彫りしている。弥陀坐像は、総高14.0cm、頭部長さ5.2cm、面幅4.8cm、膝部最大幅10.5cmを測り、頭部で0.8cm、体部で0.5cmの厚さに彫られており、全体に下半部ほど彫りが浅くなっている。また顔面には、目、鼻、口が薄く彫られている。輪郭の下端より下半は、３cm程の幅で原石肌が削りとられているだけで、額と同様原石肌のまま未加工である。

加　工　小形板碑各部の加工は、正面の弥陀坐像とその輪郭を別とすれば、加工は左右両側面と頂部山形の二辺にのみ認められる。この２ヵ所は、板碑の外形を形作るための加工である。左右両側面は、石の節理に



① 比較的扁平な河原石を選び、まず製作しようとする板碑の天地を決める。

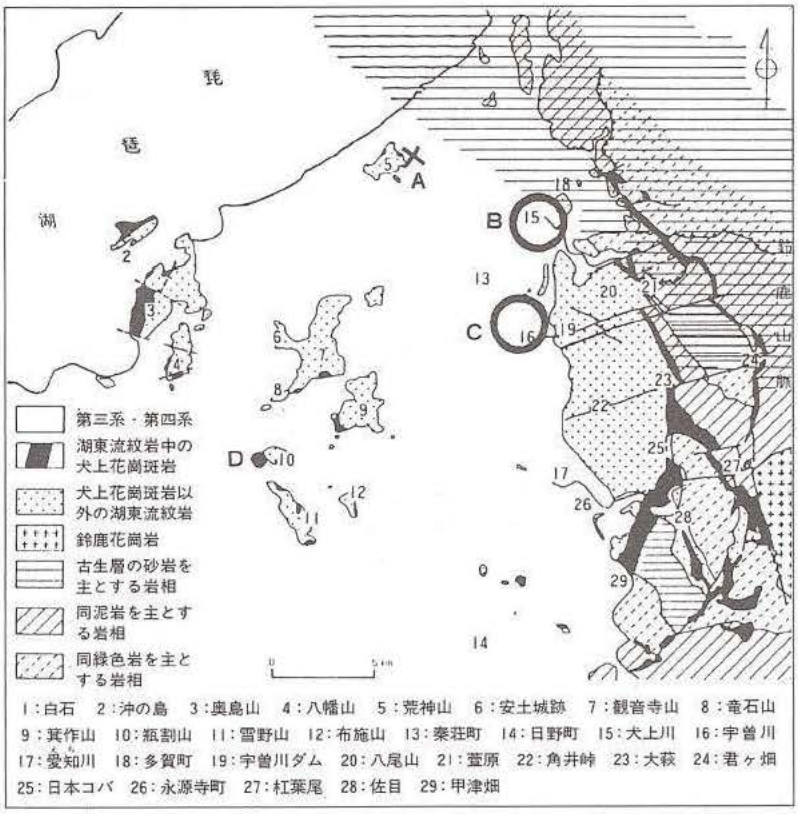
② 河原石の左右を打割って、板碑の幅を決めてしまう。

③ 額部の高さを決めて、頂部の山形を整えるため、額部と身部の境界線を彫りこむ。

④ 頂部の山形を作るため、丸味のある原石のカーブを打欠いて三角形の二辺を整える。
（模式図では大きな剝片を描いているが、実際には何回かに分けて打欠いている）

⑤ 最後に表面を彫りこんで輪郭を作り、中央に弥陀坐像を半肉彫りする。（板碑正面のアミ部分は、原石肌を残す部分である。背面は原石のままで、まったく手を加えていない）

第4図　小形板碑の製作工程



A．妙楽寺遺跡
B．犬上川石材採集候補地
C．宇曽川石材採集候補地
（川は改修されており観察できないが、この付近の土層断面に玉石が露出している）
D．近江八幡市岩倉

第５図　湖東流紋岩分布図
（『滋賀県百科事典』P295に加筆）

そって打割りの後、身部の側面は、細部の凹凸をタガネのようなもので調整している。また、頂部の山形を作るための調整は打欠きによるものであるが、それ以前に加工しやすいように、河原石のカーブが山形に近いところを意識的に選んでいる。この他、板碑の正面は、河原石の表面の滑らかな部分を意識して用いている。ただ、土中に埋めこまれる正面下半部（県内では一般的に、粗く舌状に整形されている）や、あまり目につかない背面は、頂部や額ほど形状や表面の凹凸を問題にしていない。

こうした観察をもとにして、推定した板碑の製作工程が第４図である。加工前の原石の用い方については、近江八幡市岩倉産の石材で作られた蒲生郡蒲生町下麻生の文保２（1318）年銘をもつ赤人寺七重塔の笠より復原した原石加工法と、基本的に変わるところはない。

年　代　近江の石造美術の編年観からみると、小形簡略化した構造や手法からみて、室町時代後期の天文年間頃――16世紀前半のものであろう。妙楽寺遺跡の遺構の形成、廃絶からみても、年代的に矛盾するものではない。

４．小　結

室町時代になって、近江各地で小形石塔造立の風が流行するようになると、当然その素材も小形化したはずである。鎌倉時代や南北朝時代の大形の宝塔や宝篋印塔などの部材より、より小形で、あるいは厚さの薄い石材で、五輪塔の部材や板碑などが作られるようになってくる。そうすると、蔵王や岩倉など比較的大きな石材が採れる場所でなくとも、条件にかなった小形の石材が豊富に入手できる場所であれば、石工さえ移動すれば大量に製作することは可能である。おそらく、小形石塔の需要の増加が、これまで石組みや石積みなど土木・建築用にしか使用されなかった湖東流紋岩の河原石を、採集の容易さ、小形石塔の製作に適した大きさ、花崗岩に劣らぬ石質などの利点から、石造品加工用素材として見直されたものと思われる。

湖東流紋岩の分布は、第５図にみられるように県下でも限られた地域から産出する。しかも河原石となると、さらに産地が限定されよう。妙楽寺遺跡から近い所では、犬上川や宇曽川などが鈴鹿山地の山麓から扇状地へ出た中流部が候補地にあげられる。ただし現状では、犬上川では現在も採石が可能であるが、宇曽川は河川改修がなされており、河原の状況が大きく変化している。しかし、扇状地面での地山の露頭をみると、加工可能な大きさの玉石が多く含まれており、比較的容易に採集できるように思われる。

今後、湖東流紋岩製石造品の分布圏の確認と、採石地の発見は、中世後半の石工の実態を探るうえで重要な課題といえよう。　（兼康保明）